

研究ノート

# 日蓮宗における海外開教の特徴とSGIの戦略

川口智徳

## 一、はじめに

日蓮宗の海外布教は、大きく「北米開教区、南米開教区、ハワイ開教区、東南アジア新開教地、ヨーロッパ開教区」と五つに分かれる。開教区毎に歴史や特色は異なるが、当研究レポートに於いては、北米開教区、ハワイ開教区、東南アジア新開教地をモデルケースとして各開教区における「歴史と特色」、「課題と未来展望」を整理すると共に、各開教区が現在抱えている問題を収集し、現地で活躍する開教師の助力となり得るよう研究調査を行った。それと同時に、創価学会インターナショナル（以下SGI）の各開教区における現状も探り、日蓮宗とSGIの比較調査を行い、未来の一天四海皆帰妙法を今一度見つめ直すことを目的に研究調査をした。

## 二、日蓮宗における海外布教の歴史と活動

日蓮宗に於ける海外布教は、六老僧日持聖人がその鼻祖と仰がれている通り、長い歴史を有する布教活動である。しかし、華々しい展開は、明治三十三年（一九〇〇年）に決死の覚悟をもって布教された高木行運師を起端としてい

る。そしてその後、明治から昭和に掛けて、日本人の海外移住者が増加すると共に、ハワイ、北米、南米を拠点に布教地が増えた。

そして、平成三年（一九九一）にSGIが日蓮正宗から破門されたのをきっかけに、その間に立たされた信者で結成された信徒団、また、その活動に対して疑問を懐き始めたのをきっかけとして結成された信徒団を擁護する形として、現地人に対して開教をする目的を中心としたヨーロッパ開教区、東南アジア新開教地、韓国まで教線を伸ばした。現在、北米、南米、ヨーロッパ、アジア、ハワイと現地人、日系人を対象として祖願成就に向け布教活動を行っている。

### 三、SGIにおける海外布教の歴史と活動

創価学会の海外組織SGIは、世界一九二ヶ国の地域に、一、二〇〇万人以上のメンバーを擁する新興宗教団体である。

昭和三十五年（一九六〇）、戸田城聖氏（創価学会第二代会長）の後を継ぎ、池田大作氏（第三代会長、現名誉会長）が就任。池田会長のもと、創価学会は、アメリカ布教を始めとして、飛躍的に発展した。

昭和五十年（一九七五）一月二十六日、世界五十一ヶ国の創価学会員の代表がグアムに集い、世界平和会議を開催した。また、この席上でSGIが正式に結成され、池田会長がSGIの初代会長に就任した。現在、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、北米、南米、オセアニアの六つの開教区で世界的な広がりを持つに至った。日系人を越えて広まった理由としては、現地語の使用、教義の翻訳、現地人の役職への登用、きめ細かい生活指導などが挙げられる。（詳細は後述）

創価学会に即した特徴としては、教学や折伏と共に座談会や個人指導を重視し、役職や文化活動を通じて人材育成

を積極的にした事により飛躍的に発展したと考えられる。

## 四、日蓮宗開教区紹介とSGIの布教活動の比較

### 四一 北米開教区『(Nichiren Buddhist Order Of North America)』

#### ■歴史と特色

アメリカに仏教団体が布教を始めたのは二十世紀始めの頃である。二十世紀の初期より日蓮仏教を学ぶ幾つかのコミュニティがあり、大正三年（一九一四）にロサンゼルス（カリフォルニア州）に日蓮宗で初めての仏教寺院が設立された。それに続き二年後にはシアトル（ワシントン州）にも設立された。サンフランシスコにも大正十一年（一九二二）に設立され、数年後、正式に北米日蓮宗仏教教団（NONA）が西海岸で設立された。その後、教線は拡大され、サクラメント、ポートランド、バンクーバーと寺院が設立されていった。

しかしながら、第二次世界大戦が開戦され、日本人、日系アメリカ人の留置などの様々な障害を受け、バンクーバーの寺院は閉めざるを得ない状況に追い込まれた。その後日蓮教団は、シカゴ、トロント、ソルトレイク、サンノゼ、ボストン、ヒューストン、ラスベガス、シャーロット、ニューヨークなどで現在、布教活動を行っている。現在、カリフォルニア州ヘイワードに日蓮宗開教布教センターを置き、十七の州で十三の教会、七つのサンガがあり、十六名の開教師、国際布教師が活躍している。

#### ■課題と未来展望

『現代宗教研究』第四十七号所収の『アメリカ仏教から見る世界開教のあり方』の中でも触れた事であるが、今後は、日系人とアメリカ人へのケアの方法、現地人沙弥への対応が課題として上がってくる。前述の問題点は、日系人

に頼りすぎている事を発端とする問題であり、日系人向けのお寺でアメリカ人に対して布教するのは、日系人とアメリカ人（現地人）に対してのすみ分けをしつかりと行わなければいけないということである。

また、北米では現地人沙弥の問題が挙げられる。この問題に対しては、平成二十五年年度 世界開教師会議でも議題に挙げられた事であるが、検定期間や修行機関の更なる改革が今後、必要になってくるであろう。そして、開教布教センターの修行機関としてのポジションを確立するためにも、更に対応策を検討する必要があると考えられる。

■北米に於けるSGIの活動（アメリカナイズされた創価学会）

北米における開教は、アメリカ軍人と国際結婚した日本人女性が個人的に信仰していたことを端緒とする。昭和三十五年（一九六〇）に池田大作会長（当時）が初めてアメリカを訪問し、組織化が本格的に行われた。当時のアメリカ在住の会員数はおよそ三〇〇世帯であったと、一九七〇年代後半のハワイと西海岸を調査した井上順孝氏は『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外』で記述している。井上氏は、一年後の昭和三十六年（一九六一）には、二、〇〇〇世帯へ増加し、その後日本人以外の白人が入会し、発展期へ突入したと記述している。会員数の割合も現地人へこの時期より徐々に移行していったようである。また、この時期は、アメリカ人に対して布教が行われた創価学会に於ける広布の第一期と創価学会内部で位置付けられる。

一九六〇年代末～一九七〇年代半ばまでを第二期と位置づけている。第二期では、創価学会のアメリカ支部というより、アメリカ日蓮正宗という独立性が強まり、非日系人信者、とくに白人の信者や学生信者が急激に増加する時期であった。また、この時期より、「ストリート折伏」と呼ばれる布教活動が展開されていった。ストリート折伏は、毎日、毎晩、街頭やレストランに出て見知らぬ人へ折伏をする布教活動である。この活動により、大量の入会者を獲得し、一九六五年～一九六九年にかけて会員数は三万人から十七万人にまで増加した。これには、ヒッピーを代表と

する多くの白人の入会、初代理事長によるアメリカ人を対象とする仏教のセミナーやストリート折伏、さらにはアメリカ社会のカウンター・カルチャー（対抗文化）の流行によるものとされている。

さらに、一九七〇年後半以降をアメリカ独立時の民主主義、自由、理念を取り入れる時期として、広布の第三期とSGIでは位置付けている。第三期は、一九七〇年代後半より、信者の増加曲線が、停滞もしくは下降の傾向を見せ始めている。第三期は、「ストリート折伏」による新たな信者獲得よりも、運営面や活動面を民主的運営に変え、メンバーの自発的信仰による人間革命を目指す路線へと変更された。日本人とアメリカ人のリーダーが協力して、アメリカに根ざし定着する、より発展できる方法の模索に入った時期と考えられる。そのため、この時期より座談会の回数も減り、第三期開始当時は、二十五万人いた会員数が三万人にまで減少したとアメリカ日蓮正宗理事長、ジョージ・ウイリアムスは語っている。

第三期以前は、表面的なアメリカ化、現地化だったと言えるが、第三期からは、アメリカナイズの初期の段階と考えられるのではないだろうか。このことにより、SGIの教えがアメリカに本当の意味で定着していったと考えられる。

多民族国家としてのアメリカでは、ユダヤ人、アフリカ系アメリカ人には、生活をする上で多くの弊害がもたらされてきたが、SGIの教えにより希望が与えられたと考えられる。また、青年部への活動、創価班（男子部に所属している会員で構成）での奉仕活動、集会への参加などによって、異なる人種であっても全人種が一つになって目的達成に邁進する。この理念こそ成功した証であり、「異体同心」の考えで広宣流布に邁進した結果、人々の生活に即した新たな価値が付加され、アメリカ社会の中で日本から渡った創価学会の教えが、アメリカナイズされ、更に発展したと考えられる。SGIは、アメリカに於いて、まさしく「多国籍宗教」を形成したといえるであろう。

現在、北米に於けるSGIの活動は、ウエスト地域、セントラル地域、イースト地域の三つの地域に分かれており、

四十七の州、一三五ヶ所に布教所があり、布教活動をしている。また、コミュニティの数で言えば、二、六〇〇以上のコミュニティがあり、盛んに活動が行われている。主な活動としては、ネイバーディスカッションと集会である。また、カリフォルニアに国際本部、ニューヨークに東部管区本部、シカゴに中部管区本部、ロサンゼルスに西部管区本部ビルが建っており、ワシントンDCに公務出版ビルが建っている。

#### 四一 二 ハワイ開教区『The Propagation district of Hawaii』

##### ■歴史と特色

ハワイにおける仏教徒の歴史を知るには、日系移民の歴史を知る必要がある。当時、米国本土の南北戦争により、ハワイ産砂糖の需要が高まっていた。そのプランテーション（大規模農園）の労働者として、日本からの移民を多く受け入れたことが日系移民の始まりとされる。

ハワイ寺院の多くは、プランテーションで働く日系移民の人々が日本から布教に訪れた各宗の開教師とともに、寺院・教会を建立したものが多く。

日蓮宗では明治三十五年（一九〇二）にハワイ島カパパラにお寺（現チベット仏教寺院）を建てた事を端緒とする。現在、ハワイには、オアフ島に三ヶ寺、ハワイ島に一ヶ寺、マウイ島に一ヶ寺がある。何れも、日系人を対象とした布教が主であるが、アメリカ本土に比べると日系人がアメリカ人を嫌うという人種差別意識があまり強くないのでアメリカ人に対しても布教が容易である。それには、パールハーバー襲撃後も、ハワイ経済は日系人が支えていたので、日系人はアメリカ本土に比べると、収容所などのキャンプに収容される事がなかったのが、要因であろう。

ハワイの一番の特色は、盆ダンス（盆踊り）を真剣に取り組む事である。先祖様が帰ってこられて、その供養の為に盆踊りをするという意味合いも強いのであるが、一番の理由は日本へのリスベクトである。天台宗、浄土宗、真宗

といったような全ての宗派で盆踊りが毎年八月に開催される。その前の月には全宗派でのピシヨップ（開教区長）会議で日程が重複しないように事前に打ち合わせをして行うので、殆ど毎週のように盆踊りが開催されている。お盆の時期になると地元紙に各宗派の予定表が掲載され、今では常夏の島ハワイの「夏」の風物詩となっている。

### ■課題と未来展望

日蓮宗に於けるハワイ開教も、昨年度一〇〇周年を迎えた。一〇〇年を過ぎた段階で、今後は何を目標に布教を行うかを検討する事が重要である。ハワイ島ヒロ教会主任菅原法正師は、次のように言及している。「建物や法人を維持していくための布教なのか、それとも全てを失う覚悟で布教の再構築を図るか、というところではないだろうか。一〇〇年後の未来を考えるのであれば後記も視野に入れる必要性が十分あり、日系人をケアしつつもSGIに見られる現地人へのスイッチチェンジの時期を迎えているのではないだろうか。」

ハワイは歴史を鑑みても、長期に亘り日系人に頼り、寺院の経営に力を注ぎすぎたのではないかと考えられる。今後は、一〇〇年後のハワイ開教の未来を考え、一天四海皆帰妙法を実現するために、日系人をケアしつつ、現地人への布教も視野に入れる必要があるのではないだろうか。

### ■ハワイ開教区に於けるSGIの活動

ハワイにおけるSGIの歴史は昭和三十五年（一九六〇）十月、世界広布の第一歩として選んだのが、ハワイオアフ島であった。つまり、ハワイは、世界広布の第一歩の地と行っても過言ではない。

ハワイにおけるSGIは、ハワイ日蓮宗別院のすぐ近くに、ハワイの本部文化センターを置いている。そのほかに、マカハセンター（オアフ島）、ヒロセンター（ハワイ島）、カウアイセンター（カウアイ島）、マウイセンター（マウ

イ島）の合計五つの布教所を有している。

#### 四―三 東南アジア新開教地『The New Propagation district of South East Asia』

##### ■歴史と特色

平成三年（一九九一）にSGIが日蓮正宗から破門されたのをきっかけに、その間に立たされた信者でマレーシアに於いてペナン日蓮宗仏教会が結成された。ペナン日蓮宗仏教会の信徒の約一二〇人は当初、新興宗教に帰属していたが、その教えに疑問を持ち、平成十三年（二〇〇一）八月、日蓮宗に支援と認知を求めてきた。当初、ロサンゼルス日蓮宗米国別院を仲介し、宗務院と電子メールを通じて開教が行われた。その後、翌年二月に宗務職員を派遣し対応した。その後、改宗会・本尊授与式が行われ、平成十四年（二〇〇二）七月にロンドン新開教地で研修を終えた小幡妙照師（現ポートランド日蓮仏教会主任）を派遣した。小幡師は、マレーシアに四日間滞在し巡回布教を行い、同年八月から常駐しその後、マレーシアやシンガポールへの開教を行った。現在では、インドネシア・台湾・タイ・ベトナム・スリランカへ教線は拡大し、マレーシアに三ヶ寺（クアラルンプール・ペナン・クラン）、シンガポールに一ヶ寺、インドネシアに一ヶ寺と、合計五ヶ寺を有する開教地である。更に、コミュニティーは台湾に二カ所、タイ、ベトナム・スリランカにも存在している。

現在、二名の開教師で上記の五ヶ寺への巡回布教をしている。金曜日にその国に入り、金曜日と土曜日の午後八時より法要を行い、日曜日に朝十一時より唱題行を行い、自国へ帰国するという日々を送っている。現在、野田寛行師は、マレーシアのペナン一念寺を拠点として巡回布教をし、エルフィナ妙布師は、インドネシアのジャカルタ蓮華寺を拠点として、巡回布教を行っている。



## ■課題と未来展望

東南アジアの現状を概観したが、アメリカの日系人問題とは別の問題が、私自身の体験として東南アジア開教区に派遣された瞬間から直面する事となった。その問題とは、今回紹介できない開教区であるが、イタリア、スペイン、フランスで活躍されているタラビーニ勝亮師、韓国寶土寺主任禹法顯師も同じような悩みを抱えているSGIとの対立である。言うまでもなく、日蓮宗に比べてSGIや日蓮正宗の猛威はとてつもなく大きく、日本では想像も付かないほど巨大組織である。SGIからは、毎週数人の方がやってきては、「日蓮宗と日蓮正宗・SGIの違いとは」という質問がくり返される。体験談であるが、英語で前もって作って於いた分かりやすい冊子を渡し、「とりあえず読んでみてください」と伝えることにしていた。そして、納得して貰った上でもう一回来て貰うことにしていた。その方法を採用した理由としては、彼らは法論のつもりで来るので、こちらが何を言っても聞き入れてくれないのが要因である。しかしながら、受け取って再び帰ってきてくれる人は少ない。しかし、再び訪問してくれば、きちんと解ってくれるまで説明をする。そうすると、次からお寺の行事にも参加してくれ、マインドコントロールも徐々に溶け始め、とても熱心な日蓮宗のメンバーとなってくれる。

また、人材不足の問題、現地人の沙弥問題も東南アジア新開教地においても考えられる。東南アジア新開教地には、六ヶ国、九カ所に布教所（寺院、コミュニティ）を有しており、二名の開教師で巡回布教を行っている。もちろん、全ての布教所に一人ずつ人員を配置する事は難しい事であるが、マレーシア、インドネシア、シンガポールに一人ずつ現地人沙弥が存在しているので、北米開教区同様、沙弥を教師まで育てる、またその役割を持たせるレイリーダー（在家指導者）を育成することが非常に大事に成ってくる。そのことが、将来の開教区の発展、安定に繋がり、円滑に一天四海皆帰妙法の祖願達成に向けた布教が出来ると考えられる。

■アジアに於けるSGIの活動

アジアのSGIの歴史は、昭和三十六年（一九六二）一月に香港、スリランカ、インド、ミャンマー、タイ、カンボジアの六ヶ国を池田大作氏が日蓮正宗の日達上人と共に訪問した事を端緒とする。香港支部は、その時に結成された。翌年に再びタイを訪れ、その際に東南アジア初の支部と成る「バンコク支部」が結成される。現在、アジアに於けるSGIの活動拠点は、北朝鮮や中国など一部地域を除いて香港、インド、インドネシア、韓国、マカオ、ネパール、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイに国際センターを置いている。

そのほかに、香港には三つの文化センター、インドネシアには十二の文化センター、フィリピンには三つの主要グループ、シンガポールには五つの文化センターと一つの青年センター、そして幼稚園を経営している。

## 五、SGIから見る世界開教のあり方

SGIは、一九二ヶ国にコミュニティーがあり、九十の国で組織を形成し、一、二〇〇万人以上の会員を有する大きな団体であり、今回、紹介した国はごく一部であることは言うまでもない。四年前の開教師会議で、元開教布教センター平井智親師（現ハワイ開教区長）は、一天四海皆帰妙法の眼前にある目標として、「ユニセフ加盟国の一九三ヶ国（平成二十三年（二〇一一年）現在）に正しいお題目修行をする場所を作ること」と言及された。

しかしながら、布教所を増やすのと同時に、日蓮宗の開教師の人材不足についての問題も浮き上がってくる。このことについては、宗報十一月号（第三〇八号）で、ハワイマウイ島、プウネネ教会主任 高崎哲道師が次のように指摘されている。

現在、日蓮宗の開教師は人材が不足している状況です。その布教拠点の経済状況の問題の為に開教師が常住できないという場所もありますが、海外には無住の拠点が幾つかあります。もし私がすぐに日本へ戻らなければな

らない状況になれば、このプウネ教会も無住の拠点になる事でしょう。残念ながら、開教師が不在の拠点は衰退の未来しかありません。(一一五頁)

結局のところ、前述の対策としては、日蓮宗開教布教センターが、読経考査、普通試験、僧道林、信行道場などの役割を果たせるようになってくる必要があるのではないだろうか。

今年度、日蓮宗では身延山研修道場において、韓国、マレーシア、アメリカ、イギリス、日本の世界各国から二十六名の参加者で「Lay Leader Retreat」が開設された。日蓮宗英字新聞十二月号を見ると、イギリスからの参加者は「自国に帰り、自国のコミュニティーや開教師の手助けをすることが如何に重要なことなのか、この研修で理解出来た」という発言をされている。

ここで考えられるのは、SGIに見られるようなリーダー制度を早いうちに構築して僧俗一体で布教を展開することではないのだろうか。それには、開教区に於いては、沙弥やリーダーの存在を日本とは違う位置づけをする必要があると考えられる。そして、その存在をSGIのように、リーダーと呼ぶべきなのか、レイリーダーと呼ぶべきなのか検討が必要であるが、それでも厳粛に法要を執り行う事ができるような存在を作るべきなのではないだろうか。もちろん、その存在になり得るには、日本で開催される「Lay Leader Retreat」に参加するなどを必須として、何らかの資格を設定する必要があると考えられる。海外では、現在沙弥や信徒でも開教師、国際布教師が巡回布教などで不在の場合、法要を執り行っているケースが多く見られる。僧侶により全てを最初から最後まで完璧に見せる荘厳な法要も、もちろん大切であるが、それに信徒が参加できなければ、「教えから逸れた一人よがり」で完成された法要ではない」と海外では解釈される。

平成二十五年度の六月に開催された日蓮宗開教師会議で、日蓮宗国際センターのあり方、教育制度改革、海外教師登録制度改革などが議題に挙げられ、ディベートが交わされた。今後、SGIが成功した海外の現地の言語の使用、

教えの翻訳、現地人の役職への登用、きめ細かい生活指導などを更なる情報収集をする必要があるのではないだろうか。

日蓮大聖人は、「立正安国論」の中で、次の様にお示しになられている。

「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり」（昭和定本四二二頁）

日蓮聖人ご在世には無かった教団が流行する世の中、少しでも早い一天四海皆歸妙法、ご降誕八〇〇年に向け、宗門として国内外問わず、更に邁進する必要があるのではなからうか。

【参考文献】

『昭和定本 日蓮聖人遺文』

『ハワイ日蓮宗 八十年のあゆみ』ハワイ日蓮宗別院著

『海を渡った日本宗教―移民社会の内と外』井上順孝著

『アメリカにおける宗教の役割』ジョージ・ウィリアムス著

日蓮宗海外布教センター <http://nichiren-shu.org>

創価学会ホームページ <http://www.sokanet.jp>

SGIホームページ <http://www.sokanet.jp/SGI/>